学位論文要旨

動物介在活動に従事する動物の内分泌的指標を用いたストレスに関する研究

酪農学園大学大学院獣医学研究科
獣医保健看護学専攻修士課程
黒野裕史

【背景と目的】動物との触れ合いが人に対して精神状態の改善や、運動機能の回復補助といったプラスの影響を与える事が知られているが、動物側が受ける影響の多くは分かっていない。そこで、本研究では動物介在活動(AAA)に従事している動物(犬、イルカ)のストレス状態を調べた。第Ⅰ章では主にAAAで老人福祉施設を訪問しているセラピー犬を対象とし、前述の Cortisol(以下 C)濃度に加え、唾液中イムノグロブリン A(secretary immunoglobulin A: SIgA、以下A)濃度 も測定した。第Ⅱ章では人との触れ合いプログラム(dolphin interaction program: DIP)に参加しているハンドウイルカを対象とし血中C濃度を調べる事で慢性的なストレスの影響を検討した。以上、動物が人との触れ合いに対してどの程度のストレスを感じるか、また、実際の活動が動物福祉的観点から考えた場合大きな問題を抱えていないかを本研究では検討した。

【材料と方法】対象はAAAに従事し、北海道ボランティアドッグの会に所属しているセラピー犬23頭と、もとぶ元気村で飼育され日常的にDIPに参加している雌のハンドウイルカ5頭とした。セラピー犬の唾液中C濃度及びA濃度とハンドウイルカの血漿中Cortisolは市販の競合 EIA キットにより測定を行った。結果の分析は、セラピー犬における AAA 時のC濃度およびA濃度の変化や年齢との相関、さらに活動回数とストレスの相関を調べた。また、DIPに参加しているハンドウイルカの C 濃度や活動頻度、年齢とストレスの相関をスピアマン順位相関係数検定によって比較した。

【結果】セラピー犬のCおよびA濃度の増減を比較したところ、共にストレス反応を示したのは約 20%の個体のみであった。また同一個体で複数回測定したものにいて、有意にストレス反応を示す個体はいなかった。C と A 濃度それぞれと年齢、累計活動回数の相関についても明らかな関連性はみられなかった。

ふれあいプログラムで活動するハンドウイルカの各個体において測定した C 濃度は日によって有意な差はみられなかった。また活動頻度による影響を比較したが p=0.37 と関連性は低かった。年齢との関連性では相関係数 r=-0.38 と弱い負の相関がみられた。

【結論】本研究から人との触れ合いにより動物が受けるストレスは問題となるレベルではない事が内部指標である Cortisol から明らかとなった。このように、不特定多数の人と触れ合う動物はストレスを全く感じていないのではなく、AAA に適した個体の性質や長年培われたAAAのプログラムが洗練された結果であると考えられる。本研究では動物福祉的観点からAAAに従事している動物のストレス状態は通常レベルに近い状態が維持されている事が示唆されたが、AAA を行う際はプログラム内容やその動物の性質に沿った活動を行う必要があることが改めて確認された。